

神々の乗り物

+ 文 岩本耕太郎 text by Kotaro Iwamoto +

ヤコペッティ監督の『世界残酷物語』という映画にパプアニューギニアの原住民が登場します。彼らはほとんど文明から隔絶した生活を送っており、旧石器時代の生活のようだと表現されています。

そんな彼らがある日、白人の飛行機を見てしまいました。大きなカーゴ機が次々と大空に離陸していくのを眺め、彼らは神がカーゴ機でいろいろな良きものを彼らに運んでくれているのだと考え、「カーゴ教」と呼ばれるような宗教になっていったのです。

挙げ句の果てに彼らは山頂を切り開いて滑走路に似たものをこしらえ、なんと木で作った飛行機の模型をそこに祭っています。仕事をしなくなり、一日中山頂で空から神が飛行機に乗って降りてくるのを待ち続けているというのです。

エジプトに始まり、ロンドン、パリ、ローマあるいはワシントンの街の真ん中にそびえ立つ四角すいのオベリスクですが、一体何の意味があるのだろうかと思っていました。オベリスクの中は

たいてい空洞ではなく、何かを入れておくものではなさそうで、あの尖塔せんとうの形が大事なようです。

世界残酷物語をみて、これはもしかして神の乗り物をモチーフにしているのかなと思ひ始めました。エジプトの時代に四角錐の尖がったものが飛んできて、中から「神」が降りてきたとしたら？ 彼らはその乗り物をモチーフとして記念碑を建てて、神の再臨を願うかもしれません。

日本でも諏訪神社の御柱おんばしらがまさにそれではないかと考えています。木を切って皮を剥いて白木にし、先を鉛筆のように尖らせています。出来立てのときは白くてつるつるの表面で、まさにロケットのミニチュアといった差し支えないではないでしょうか。ご神木といいますが神の宿る木を切ってしまったては生命を絶ってしまいます。どう考えても木が大事なのではなく、あの形が大事なのではないかと考えられるのです。

オベリスクも御柱もカーゴ教と同じだとすると、それを立てる理由は、ま

た神に来てほしいからでしょう。上から神の乗り物の模型を発見してもらって降臨してもらいたいという心理なのではないでしょうか。

ナスカの地上絵も上から見ると向けて造られていることを考えれば、古代の神は空を飛んでいたと考えられるのです。ロケットから降りてきた神とは？ 宇宙服を着たエイリアンかもしれないですね。



profile

帝国クリニック院長

1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。

山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を研究、1993年より現職。

サーフィンとクラシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。

著書に『患者さまが増える』（H&I出版）、『エグゼクティブが実践するたった一つの健康法』（中経出版）